



RING ART

2012-13 Primavera



「日韓友情の壁」記念碑 慶北大学校芸術大学美術学科

2012年3月、慶北大学校と長崎大学の友情の証である「日韓友情の壁」壁画の修復作業が行われた。20年以上も交流を続けた結果を称えて「日韓友情の壁」壁画の東側は長崎大学側で、西側は慶北大学側が再び描き、装いを新たにした。2012年7月に朴南姫教授（慶北大学校）の計らいによって、この壁画の由来を記す記念碑が2012年7月に設置された。

RING ART Vol.2 2012-13 Primavera

RING ART 2012-13 Primavera
—2012年度 活動報告書—

編集・発行：RING ART 2013年7月
(井川惺亮 野坂知布 廣岩裕香 岩永晃典
前田真希 佐藤千代子 中田 寛昭)

協力：長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室・井川瑠実

<http://www.ringart.jp/>

表紙写真：ポルト大学美術学部エントランス

春風ながさきより 2013 in ポルト — 3

2013.3.7-28 ポルト大学美術学部美術館

春風ながさきより 2012 in 慶北大学校 — 6

2012.3.7-24 慶北大学校美術館

春風ながさきより XV 2013 — 9

2013.3.25-30 長崎ブリックホール

OBAMA de ART! — 12

2012.11.19-25 小浜市にこここふれあいハウス

平和展・8+9 2012 — 13

2012.8.19-25 長崎ブリックホール

春風ながさきより XIV 2012 — 17

2012.3.17-25 長崎ブリックホール

ワークショップ・講演会 — 20

メッセージアート — 22

パンフレット制作にあたって — 24

リングアートメンバーから — 25

招待作家から — 27

資料 — 29

A Brisa da Primavera de Nagasaki 2013



ポルト歴史地区の中央に建つクレリゴス教会の鐘楼



(左から)
井川瑠実氏(通訳)
アントニオ・マルケス ポルト大学副総長
朴南姫 慶北大学校教授
井川惺亮 長崎大学名誉教授
アントニオ・デヴェーザ・サ・ペレイラ 在ポルト韓国名誉総領事
ペドロ・サンバイオ ポルト市役所美術館・文化遺産課担当



姜ハレム 昌原大学校教授と井川瑠実氏(通訳)



フランシスコ・ランジョ ポルト大学教授(左)
朴南姫 慶北大学校教授(右)



井川惺亮 長崎大学名誉教授と井川瑠実氏(通訳)



ポルト大学美術学部正面

春風ながさきより 2013 in ポルト大学



「春風ながさきより2013」開催にあたって

「春風ながさきより2013」は、韓国の慶北大学校、昌原大学校、日本の長崎大学、そしてポルト大学美術学部のアーティストたちの作品が集う、展覧会プロジェクトです。ユニークかつ多くを学び、国際的視野を広げるチャンスとなる本展覧会プロジェクトを、ポルト大学美術学部にて開催します。本展覧会は今後の国際交流のあり方の道しるべとなることでしょう。

本展に参加するメンバーにはプロジェクトの過程を通じて、研究意欲を高め、そして本展で得られる繋がりを、今後の更なる文化交流の発展に努めながら参加していただきたいと思えます。本展覧会では、ポルト大学美術学部の講師や学生たちも交え、様々なバックグラウンドを持ったアーティストたちが集結します。デモンストレーション、特別講演、ワークショップ、そして作成予定のカタログは、本展覧会の意義、プロセス、様々なバックグラウンドへの関心や、それら独自の手法を理解する手助けとなり、当美術学部にとっても実り多いプログラムとなることでしょう。

フランシスコ・ランジヨ (ポルト大学美術学部長・教授)



Brisa da Primavera de Nagasaki



期 間：2013年3月7日～3月28日
 場 所：ポルト大学 (ポルトガル)
 主 催：ポルト大学
 特別講演：3月7日 朴南姫 (慶北大学校教授)
 ワークショップ：3月7日 姜バレム (昌原大学校教授)
 3月8日 井川愷亮 (長崎大学校名誉教授)





春風ながさきより 2012 in 慶北大学校

춘풍
나가사키로부터



期 間：2012年3月7日～3月24日
 場 所：慶北大学校美術館（韓国・大邱）
 主 催：慶北大学校芸術大学芸術学科
 慶北大学美術館、RINGART
 特別講演：3月7日 13:00～16:00
 講師 井川惺亮（長崎大学校名誉教授）
 フランシスコ・ラランジョ（ポルト大学教授）
 ワークショップ：3月8日

Artists



井川 惺亮 Seiryō Ikawa



フランシスコ・ラランジョ Francisco Laranjo



姜パレム Kang Ba Raem



朴南姫 Park Nam-Hee



野坂知布 Tomonori Nosaka



廣岩 裕香 Yuka Hiroiwa



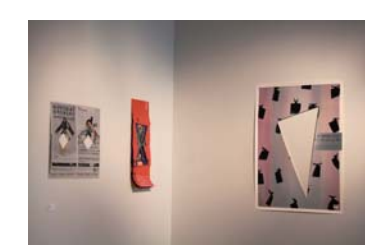
ドミンゴス・ルーレイロ Domingos Loureiro



ファティマ・サントス Fátima Santos



佐藤千代子 Chiyoko Sato



前田真希 Maki Maeda



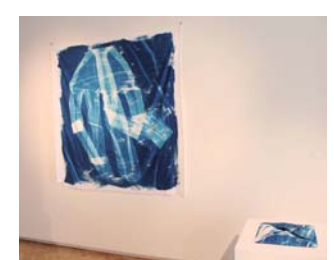
岩永晃典 Akinori Iwanaga



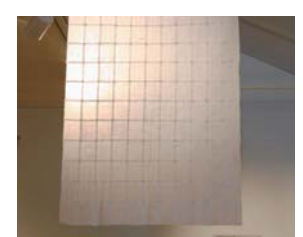
松尾美希 Miki Matsuo



ソフィア・トレス Sofia Torres



申 京愛 Shin Kyung Ae



井ノ上 理恵 Rie Inoue



小栗栢まり子 Mariko Ogurisu



マリアーナ・カレヴァーリョ Mariana Carvalho



中田 寛昭 Hiroaki Nakada



井川 惺亮 Seiryu Ikawa



フランシスコ・ラランジョ Francisco Laranjo



朴 南姫 Park Nam-Hee

Kungpook National University Art Museum

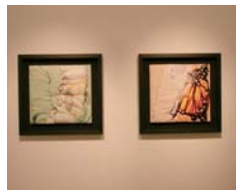
Artists



李 基七 Yi Gee-Chil



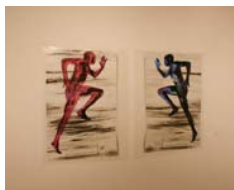
柳 宰夏 Ryu Jae-Ha



李 延恩 Lee Jung-Eun



姜パレム Kang Ba Raem



洪 東植 Hong Don-Sik



申 暎浩 Shin Young-Ho



林 賢洛 Lim Hyun-Lak



高 寛浩 Ko Kwan-Ho



金 泰福 Kim Tae-Bok



金 昭榮 Kim So-young



申 京愛 Shin kyung Ae



李 男美 Lee Nam-Mi



守屋 聡 Moriya Satoshi



中田 寛昭 Hiroaki Nakada



岩永 晃典 Akinori Iwanaga



森永 昌樹 Masaki Morinaga



野坂 知布 Tomonori Nosaka



井ノ上 理恵 Rie Inoue



佐藤千代子 Chiyoko Sato



田熊 沙織 Saori Taguma



松尾 美希 Miki Matsuo



藤上 慶 Kei Fujikami



川田 剛 Tsuyoshi Kawada



廣岩 裕香 Yuka Hiroiwa



世界に開かれた新しい芸術的認識のために

2013年「春風ながさきより」を私が企画し、慶北大学校芸術大学美術学科が公式的な役目を果たし、慶北大学校美術館で開催された。もちろん日本から井川先生と RING ART 運営委員、ポルトガルからランジヨ先生が慶北大学校を訪問した。「春風ながさきより」に伴い学術大会も開催され、慶北大学校と長崎大学の友情の証である「日韓友情の壁」壁画の修復作業が行われた。

2013年3月、ポルト大学のランジヨ教授が「春風ながさきより」を企画され、井川先生と私がユネスコ歴史文化遺産地として由緒あるポルトを訪問することとなった。

慶北大学校と長崎大学の交流はポルトガルにつながり、韓国と日本の交流にポルトガルが合流し、新しい刺激となった。誰よりも芸術を愛し、日本を愛し、長崎を愛する井川先生の挑戦と情熱が、江戸時代の日本が最初に門戸を開いた国家ポルトガルの交流を通じ、新たな道しるべを試みた。そのためにおそらくいち早く井川先生の娘さんがポルトガル語を専攻し、交流の間に立って文化の違いを克服し、芸術交流という究極の目標に向かう役割を果たしたと言っても過言ではないだろう。

井川先生を通して、江戸時代に最初の門戸を開放した長崎の開港精神が読み取れる。その開港精神は世界に向かって開かれる芸術的共通認識のためのもう一つの関門を開くことだ。

長崎大学を越えて、RING ART を通し、もう一つの関係を形成し、その関係を通じて芸術は更に発展し新たな変化を遂げるだろう。

朴 南姫 (慶北大学校芸術大学教授、画家、美術史学博士)

춘풍 나가사키로부터

井川惺亮氏(長崎大学名誉教授)とフランシスコ・ラランジョ教授(ポルト大学)



川村 愛子



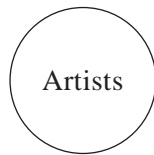
川田 泰子



金子 衛



岩永 晃典



Artists



田熊 沙織



下田 富美子



重野 裕美



佐藤 千代子



姜 善英



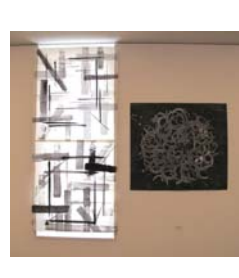
兵庫 由紀子



林田 信代



野坂 知布



永田 則子



中田 寛昭



松尾 美希



増田 和剛



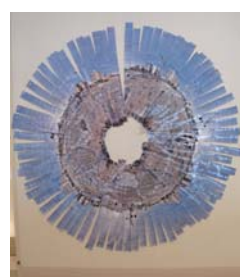
前田 真希



藤上 慶



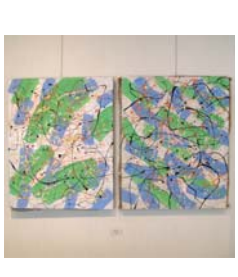
廣岩 裕香



吉岡 宣孝



森永 昌樹



村里 政則



武藤 三重子



溝上 強



洪 東植



Heo Narae



崔 民建



烏 鳴鳴



烏 鳴雷

〈招待作家〉ポルト大学美術学部教授 Graciela Machado



〈招待作家〉現代美術家 福原 金太郎



春風ながさきより XV 2013

期 間：2013年3月25日～3月30日
 場 所：長崎ブリックホール
 主 催：RING ART
 共 催：長崎大学教育学部
 ギャラリートーク：3月25日 14:00～

〈招待作家〉昌原大学校教授 金 弘震



長崎大学名誉教授 井川 惺亮

ポルト大学のフランシスコ・ランシヨ教授からの提案によって3月に開催された、ポルト大学での「春風ながさきより」に引き続き、通算15回目（海外展を含めて17回目）となる本展を長崎ブリックホールを会場に開催した。

本学と協定校の韓国・昌原大学から、金弘震（キム・ホンジン）教授を、ポルト大学からは美術学部副学部長クラシエラ・マシャード教授を招待した。また、ポルト大からは学生にも作品参加してもらっている。

今回は出品者総数53名、うち海外（韓国・中国・ポルトガル）からの参加数27名（51%）と海外参加者の割合が過去最も多い展覧会となった。

また、特筆すべき出来事として、現代美術家として長年活躍されてきた福原金太郎氏を特別参加として本展にお迎えできたことだ。会期最終日、福原氏のご家族と一緒にこの会場を訪れ、本展に大きな花を添えていただいた。



「にこにこふれあいハウス」会場風景

OBAMA de ART! RING ART 展 in 小浜

期間：2012年11月19日～11月25日
 場所：にこにこふれあいハウス
 企画：RING ART
 協力：小浜ば花いっぱいにするで・雲仙市商工会
 (関連企画)
 ◎絵画ワークショップ 11月25日 14:00～15:30
 ◎昌原大学校芸術大学教授陣によるトーク 11月21日 17:00～



井川惺亮氏による「絵画ワークショップ」



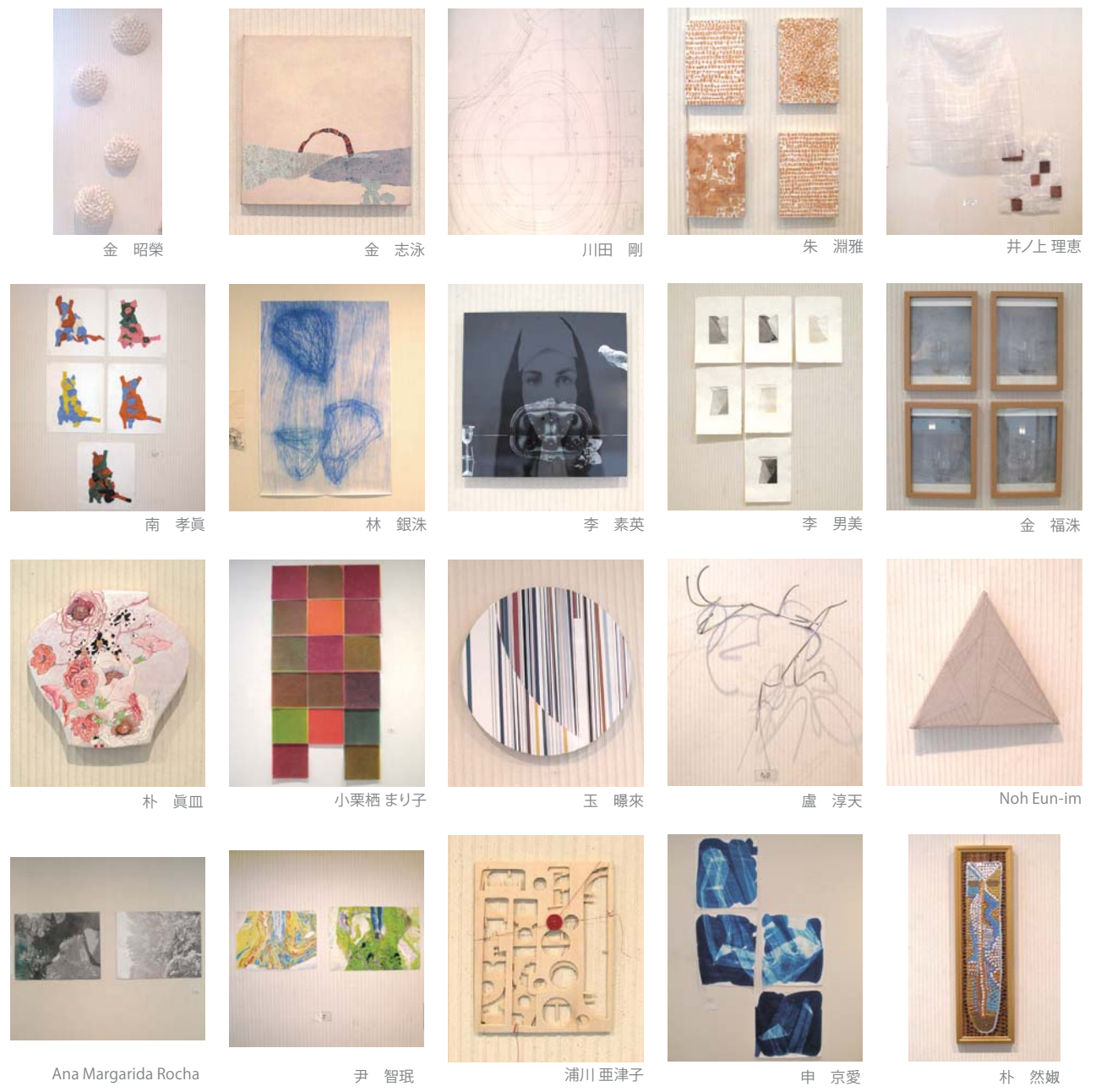
昌原大学校芸術大学教授陣を招いてのトーク



長崎大学長表敬訪問
 片峰 茂 長崎大学長
 キム・ギョンス 昌原大学校芸術大学長



(左端) 音楽科長 キム・ドンソク教授
 (左から4人目) デザイン学科長 イ・ドワン教授
 (左から5人目) 美術学科長 カン・ハレム教授
 (中央) 芸術大学長 キム・ギョンス教授
 (後方右から2人目) 舞踊学科長 キム・テフン教授



金 昭榮 金 志泳 川田 剛 朱 淵雅 井ノ上 理恵
 南 孝真 林 銀珠 李 素英 李 男美 金 福洙
 朴 眞皿 小栗栖 まり子 玉 曝來 盧 淳天 Noh Eun-im
 Ana Margarida Rocha 尹 智珉 浦川 亜津子 申 京愛 朴 然嫩

関連企画: ギャラリートーク 2013年3月25日 長崎ブリックホール 2F ギャラリー



金 弘震 教授(昌原大学校) (右) 井ノ上理恵(通訳)



永田 則子氏 吉岡 宣孝氏 溝上 強氏

芸術の秋、韓国昌原(チャンウォン)大学校と長崎大学との学術協定が9月末に提携更新となった。そこで昌原大学校一行がそのお礼を兼ねて、長崎大学長の表敬訪問するため、長崎大学を訪れることとなった。

長崎大学名誉教授井川惺亮氏は、これまで昌原大学校と長年に渡り交流を行ってきた経緯があり、井川氏が大学を退官後も、長崎大学井川研究室を引き継ぐ「RING ART」がこの交流を継続している。

RING ARTは昌原大学校一行の歓迎の意を含め、小浜で開催することになった本展であるが、「小浜ば花いっぱいにするで」(代表 城谷雅司氏)と雲仙市の協力によって実現した展覧会と関連企画である。小浜の空き店舗を改装したギャラリー「にこにこふれあいハウス」の提供や作品展示など地元の方々からの温かい支援と協力によって開催することができた。また展覧会以外にも井川惺亮氏による「絵画ワークショップ」や「昌原大学校芸術大学教授陣によるトーク」なども関連企画として実施し、地域の子どもたちやご年配の方まで、幅広い年齢層の方々アートを通じた交流を図ることができた。

1995年から始まった「小浜ば花いっぱいにするで」との連携は、来年20年目を迎える。RING ARTは国際交流やワークショップなど、今後も小浜との交流をさらに深めながら、アートによる地域活性化への貢献を果たしていきたいと願っている。



〈特別出品〉多摩美術大学教授 木嶋正吾



〈特別出品〉崇城大学教授 星加民雄



〈特別出品〉九州造形短期大学特任教授 前田 信明



朴 南姫教授(慶北大学校教授)と通訳する申 京愛氏(左)

平和展・8+9 2012

期 間：2012年8月19日～8月25日
場 所：長崎ブリックホール
主 催：RING ART
共 催：長崎大学教育学部
ギャラリートーク：8月19日 14:00～15:30

〈関連企画〉

- ◎折り鶴パフォーマンス
- ◎秋の彩展「私たち、ぼくたちの小浜風景を描こう！」



〈招待作家〉慶北大学校教授 李 延恩



〈招待作家〉慶北大学校教授 朴 南姫



井川 惺亮

山本 伸樹



山本 伸樹



吉岡 宣孝



吉田形勳



渡辺 航



降田 達季



村田 潤一



村山 美菜子



山村 知宏



山村 みき



森永 昌樹



菱川 瑠有



兵庫 由紀子



廣岩 裕香



藤上 慶



前田 真希



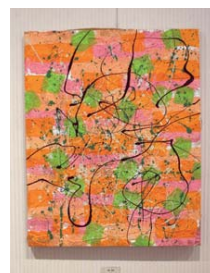
増田 和剛



松尾 美希



武藤 三重子



村里 政則

平和展・「8+9」は、1987年から続けている地域に根差した国際的平和展である。

昨年の「8+9」展では、東日本大震災後、被災地の復興や福島原発の事故に直面し、私たちメンバーが、長崎でアートによる平和活動を継続する中、「平和」そのものを改めて実感することとなった。また韓国、中国からの友情出品や支援があり、彼らの表現に一段と力がかもっているのを見ると、アートによる平和活動を一層高めることができた展覧会であった。依然として原発問題に直面している現状、私たちはアートを通じて今こそ社会に貢献する使命を感じている。私たちの取り組みはほんのささやかなものだが、この長崎から平和や命の尊さアピールしていきたいと願っている。

今回の特色は、美術作品以外にも長崎における平和活動者や詩人によるメッセージをアートとして展示したことである。また長崎大学協定校の韓国慶北大学校からは朴南姫教授、李延恩教授の2名を招待し、アートによる国際的な平和の在り方を考える機会となった。

関連行事では、ギャラリートークや子どもを対象にしたワークショップを開催した。また1987年に井川のデザインにより原爆落下中心地公園に建立された『誓いの火』灯台台モニュメントで、『折り鶴パフォーマンス』を8月9日に実施した。

出品者総数80名、うち海外からの参加者33名(団体を除く)と過去最多の参加数。



金 福洙



韓 榮愛



林 銀洙



朴 眞暉



崔 民建



田熊 沙織



団野 雅子



中田 寛昭



永田 則子



野坂 知布



朱 淵雅



伊 智瑛



南 孝眞



浦川 亜津子



井ノ上 理恵



川田 泰子



姜 善英



佐藤 千代子



重野 裕美



下田 富美子



朴 然娥



李 男美



川田 剛



申 京愛



盧 淳天



入江 一樹



岩永 晃典



鶴殿 美佳



遠藤 真知子



金子 衛



三和幼稚園 (50名)



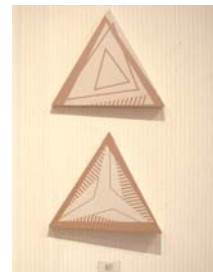
長崎市立東長崎中学校
美術部生徒 (60名)



長崎大学教育学部附属
特別支援学校
高等部生徒 (12名)



洪 東植



盧 垠妊



烏 鳴雷



利西



Gino Sansone



井川 健亮



糸山 景大

関連企画: ガラリートーク 2012年8月19日 長崎ブリックホール 2Fギャラリー



李 延恩 (慶北大学校芸術大学教授)



前田 信明氏 (九州造形短期大学特任教授)



メッセージアートに参加した廣瀬方人氏
(長崎証言の会代表委員)

申 京愛氏



入江一樹君と井川健亮氏



金 聖暎



李 素英



HEO NARAE



嚴 美錦



烏 鳴雷



玉 暎來



小栗栖 まり子



金 志泳



Lora Roussinova



李 永照



〈特別出品〉藤本 均定成

オープニングセレモニー

左から
井川惺亮(長崎大学名誉教授)
王 晨林 副教授
楊 建華 教授
山下 敬彦(長崎大学産学官連携戦略本部長)
河野 英雄(長崎ブリックホール館長)
松尾 美希(RING ART)



春風ながさきより XIV 2012

期 間：2012年3月17日～3月25日
場 所：長崎ブリックホール
主 催：長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室
共 催：RING ART
オープニングセレモニー：3月17日 12:00～
ギャラリートーク：3月17日 14:00～



金子 衛



岩永 晃典



糸山 景大



井川 惺亮



佐藤 千代子



倉掛 美代子



川村 愛子



川田 泰子



中田 寛昭



田熊 沙織



下田 富美子



重野 裕美



廣岩 裕香



兵庫 由紀子



林田 信代



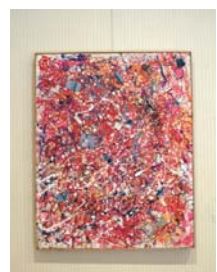
野坂 知布



吉岡 宣孝



森永 昌樹



村里 政則



松尾 美希



〈招待作家〉楊 建華教授 (中南财经政法大学新闻与文化传播学院)



〈招待作家〉王 晨林副教授 (华中农业大学楚天学院动画学)



「春風ながさきより」は14回目を迎えた。前回は、東日本大震災とそれに伴う原発トラブルが発生し、実施が危ぶまれたが、このような時こそアート活動で、特に被災者の皆様へ勇気と希望を与えるものとして実現した。更に全国民の方々と共に助け合いの心を共有しながら、国際間でも共有することが出来た。その例として長崎と姉妹都市であると同時に、出島時代からの交流のあったポルトガルのポルト市のアーティストを招待した。

震災直後の当時、外国人は原発の放射能を警戒し日本脱出や、また日本への入国自粛ムードが高まっていた。そんな中、ポルト大学のラランジョ教授や、韓国の朴南姫教授、姜パルム教授らが勇気を持って来日し、私たち日本人に希望や元気をいただいた。これこそ国際交流の醍醐味であることを実感した瞬間であった。

14回目の本展では、前回同様、日本・韓国・ポルトガルのアーティスト作品に加え、その頃話題になっていた長崎上海航路再開のニュースから、中国の若いアーティスト2名を招待し、長崎において日中の実りのある美術展となるよう、願いを込めて開催した。

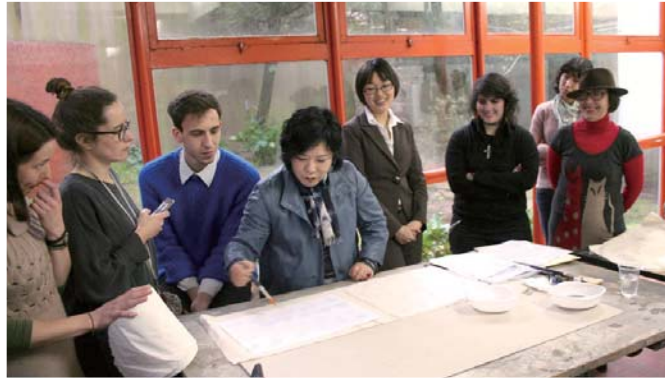
出品者数46名、うち海外からの参加者24

ワークショップ・講演会

春風ながさきより 2013 in ポルト大学

姜パレム氏(昌原大学校教授)による韓紙を使ったワークショップ↓

↓ 朴南姫氏(慶北大学校教授)による特別講座



↑ 井川惺亮氏(長崎大学校名誉教授)による折り紙を使ったワークショップ

春風ながさきより 2012 in 慶北大学



↑ 慶北大学生との壁画制作

↑ イ・ドンジン先生を囲んで

フランシスコ・ラランジョ教授による特別講演会↑

OBAMA de ART! RING ART展 in 小浜



↑ 小浜町の方々を招いて行われたワークショップ



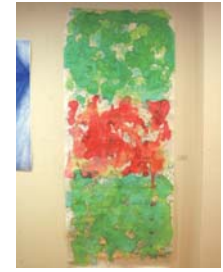
洪 東植



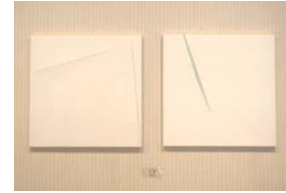
崔 民建



烏 鳴鳴



烏 鳴蓄



李 男美



金 福洙



川田 剛



井ノ上 理恵



朴 眞皿



小栗栖 まり子



盧 淳天



林 銀洙



尹 智珉



浦川 亜津子



申 京愛



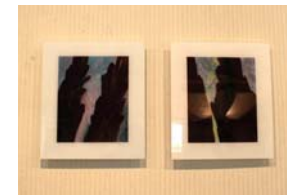
朴 然姫



Fátima Santos



Francisco Laranjo



Domingos Loureiro



Sofia Torres

関連企画: ガラリートーク 2012年3月17日 長崎ブリックホール 2Fギャラリー

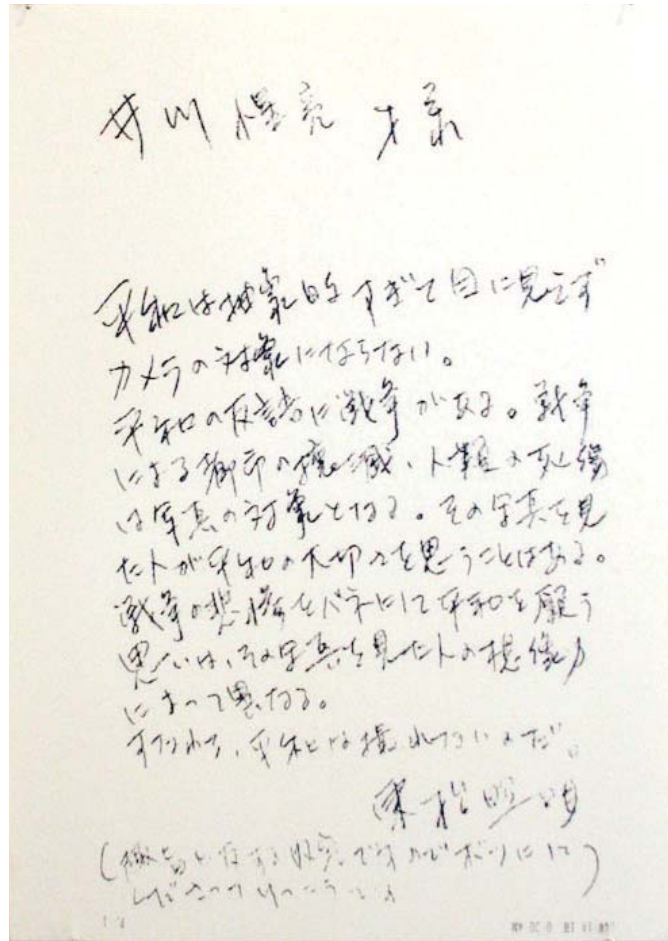


〈招待作家〉
楊 建華教授(中南财经政法大学新闻与文化传播学院)



長崎大学長表敬訪問

井口 均教授 楊 建華教授 片峰 茂学長 王 農林副教授 井川惺亮名誉教授



平和は抽象すぎて目に見えず
カメラの対象にならない。
平和の反語に戦争がある。
戦争による都市の壊滅、
人類の死傷は写真の対象となる。
その写真を見た人が
平和の大切さを思うことはある。
戦争の悲惨さをバネにして
平和を願う思いは、
その写真を見た人の
想像力によって異なる。
すなわち、平和は撮れないのだ。

東松 照明

2012年8月

折り鶴パフォーマンス

1987年8月9日、井川惺亮氏のデザインによって長崎市爆心地公園に「誓いの火」灯火台モニュメントが建立された。この長崎を最後の被爆地にしようという強い願いを込め、2002年より、8月9日平和の日、この灯火台モニュメントの下で、平和を希求しながら折り鶴を折り、モニュメントに貼り付ける『折り鶴パフォーマンス』を行ってきた。



↑長崎大学教育学部附属特別支援学校の生徒たち

↑道行く人が平和への思いを込めながら折り鶴を折る

秋の彩展「私たち、ぼくたちの小浜風景を描こう！」

〈講師〉井川惺亮（長崎大学名誉教授）・岩永見典（岩永梅寿軒）
〈主催〉「小浜ば花いっぱいすうで」事務局
〈日時〉8月23日10:00～14:00 〈場所〉小浜温泉公園



↑小浜の風景スケッチや和菓子作り体験を楽しむ子どもたち

「メッセージアート」

堀田善衛の作品に「ゴヤ」がある。元スペインの宮廷画家であったゴヤは、ナポレオン軍の支配下にあい、最後はフランスに亡命して生涯を終えているが、数々の傑作と同時に戦争の惨禍を版画集として残している。堀田氏はそれらの作品を探し求め、その目でしかと見るために、美術館から個人の蔵書に至るまで、あらゆる手立てを厭わず訪ね歩く。作品を見ると、いうことはこういう事かと強く印象に残った。

1983年 8月、オリンピック発祥の地オリンピックアで採火された聖火が、ギリシャの文部科学大臣メリナメルクリの許可のもと、アテネ市長のメッセージを添えて長崎市民に贈られてきた。その聖火を都ともし続けるための灯火台建設運動が始まった。

灯火台デザインの選定をめぐっては、全国公募60点から井川惺亮氏の作品に決定するまでの2年間、平和を表現する多様なデザインに刺激され、楽しみながら4人の審査員の決定を待った。

井川惺亮氏のデザイン案は、当初 10メートルの高さを持つ塔であった。平和公園内を希望する建設委員会と市の交渉は難航し、妥協点として高さを5メートルに抑えることで決着した。爆心地から階段を上って資料館に至る道筋、死者を悼み、平和な時代を築く希望のシンボルでもなければならぬ。白亜の塔に 7色のカラーをまとった灯火台は、異色のモダンアートとなった。小さくさまざまなタイトルは、暑い夏の日々を井川教授とゼミの学生達が窯元に泊まり込み、土をこね、職人が焼き上げたものである。

古代ギリシャの祭典は、エケイリア「聖なる休戦」をもうけ、オリンピック開催中は戦争をやめて武器を捨て、競技の勝利者にはそれが敵であるうと喝采の拍手を送った。国際児童年の集いの例外を除き、オリンピック発祥の地であるオリンピックアの聖火が海外に出ることはない。まさしく平和と人類の融和を願う聖火は、被爆地長崎だからこそ贈られてきたもの。

モダンアートの灯火台は、ナガサキが「最後の被爆地となり続ける」事を願うシンボルとして建ち、多くの人々の目で見守られ30年目の夏を迎えている。

長崎を最後の被爆地とする誓いの火維持会
宮本圭子

「メッセージアート」

「証言長崎が消えた」の表紙原画が井川先生から届いたのを見たときは本当にびっくりした。私がひそかに考えていたものと全く異っていたからだ。全体が赤色系を主張した明るい絵だ。暗くて、痛々しくて、悲惨なという被爆から受けるイメージとは全く逆の色調。よく見ると、魚が泳いでいる。鳥が飛んでいる。クジラみたいなものもいる。そしてミジンコも。みんなあたり前のようにそこにいる。希望の色に溢れている。私たちは希望のないところでは生きることができない。核兵器廃絶に向かって共に進んで行くことが訴える表紙であった。

2012年8月13日

長崎の証言の会代表委員 廣瀬方人

「アートと平和」

「音楽の道」を志して、今年で曲がりなりにも45年を迎える。歌い手として、また作り手として「平和」をテーマに少なくない数の作品を手がけて来たのだが、「アート」の方は全くの門外漢であることを先ず申し上げなければならぬ。

「歌」を歌う時、「一枚の絵」を思い浮かべながら歌う、或いは歌い終わった時、聴衆に「一枚の絵が浮かぶような歌を歌えと言われ続けて来た。言葉では簡単に言えるが、至難の業であることに違いない。」「平和」をテーマに歌う時、浮かぶのは「母と幼子」「柔

らかな風が吹く草原」「雲ひとつない青空」等々その「一枚の絵」は果てしなく浮かんで来る。平和な光景はどこにでも確かにあるものだ。と同時に、平和とは言えない光景も様々な形で飛び込んで来る。

「歌」を歌うこと、それはまさしく「人間の心」に向かつてメッセージを伝えることだと私は思う。ただ「一点」「いのち」を積極的に評価する立場で、すべての武器を、すべての核兵器を無くすことは私のいのちのある間には叶わない願いであるのだろうが、武器を、核兵器を使わない、使わせない心を培うことは、かなりの限界はあるにしても意味のあることだと考えている。

私の座右の銘、「心の上に胃袋を置くことなく生きる！」還暦をとうに過ぎた年齢になるが、蓄積したものはわたしの「心」にある思いだけだ。これからも時を惜しみながら、場所を求めながら、「平和な一枚の絵」を心に描いていただけるような歌を歌い続けて行きたい。

音楽家 寺井一通

「アートと平和」

私には町の風景が様々な線の重畳に見える。建物の輪郭や窓枠の直線、たわんだ電線が作る放物線、そして植物、雲、山など、自然が見せる不定形な線。

「ああ、この枠で切り取れば、なんだか北斎の絵と似ている」と、カメラのシャッターを

押してみたこともあるが、写されたものを見ると、たいていは失望する。自分の眼に見えるものとはまるで違うものがそこにあるからだ。私が見ているものと現実の風景とは異なっている。

音についても同じだ。喧騒の中でも聴き取りたい音はきこえてくるが、録音された音の風景は、自分が聴いているものとは違う。見える（聴いている）もの、そして、現実に見ること（聴くこと）はできないもの。そのようなものが絡み合い、形として生み出されたものがアートなのだろう。

内なる芽を想像の力で伸ばし、眼前の作品の奥にある、自らは未だ持たず、作者の視線を感じ取るようにする。

作曲家 小畑郁男

真の平和が無ければアートは無し

真の平和から アートは生れる。

真のアートから 平和は生れる。

アートは万人の為に、

アートは地球の未来の為に。

時空を超えて真の平和を。

時空を超えて真のアートを。

2012年8月

和歌山大学 特任教授 渡部幹雄

パンフレット制作に当たって

本誌は、2012年3月から2013年3月までの1年間のRING ARTの活動記録集です。その活動実績の裏付けとして、昨年に続き、今回第2号を発行しました。

RING ARTは、地元長崎で現代アートを実践し、様々な地域や国との交流を行い、そしてここで新たな文化を形成しながら、かつ発信拠点となることを目指しています。RING ARTの結成は2010年ですが、その母体となった長崎大学井川研究室から数えると、この活動も来年で30年目を迎えることになります。一地方における現代アートと地域、国際交流など先駆的な取り組みは、現在ではRING ARTという新たな形態に生まれ変わり、その成果が形となって実を結び、それらを紹介します。

まず昨年3月、韓国・慶北大学校美術館企画「春風ながさきより」、そして今年3月、ポルトガル・ポルト大学企画「春風ながさきより」の開催は、私たちの取り組みの国際的な評価の証と言えます。今回の目玉となるふたつの展覧会を本誌巻頭に飾りました。

次に紹介する長崎開催の「春風ながさきより」は、今年で15回目を迎えました。市民レベルでの国際交流は、会場であるブリックホールの名のおりブリック（煉瓦）が積み重なるように、長年の継続が次の新しい交流を生む機会となって展開してきました。本誌では慶北大学校における春風展を企画した朴南姫教授ら2名の作家を招待した第15回展、中国・武漢から若い2人の作家を招待した14回展の記録をまとめています。

もうひとつのRING ARTの大きな活動の柱として、アートの力で平和をアピールする「平和展8+9」があります。87年に始まったこの展覧会も年々規模を拡大し、昨年は過去最多となる80名を超える参加数となりました。そのうち韓国をはじめとする海外からの出品者は約半数近くを占め、国際的な視野からも平和について考える機会となっています。昨年は初めての試みとなった「メッセージ・アート」に、昨年急遽された美術家東松照明先生から平和とアートに関するメッセージが届きました。私たちの活動のよき理解者であり、心の支えでもあった東松先生への敬意と感謝の意を込め、本誌にその原文を添えています。

この他にも8月9日、爆心地公園・灯台での「折り鶴パフォーマンス」、小浜の子どもたちを対象に行ったワークショップ、昌原大学校教授陣を歓迎した展覧会など、平和活動から子ども教育まで幅広く活動に取り組んだ1年間の活動を項目ごとに記録をまとめています。

巻末には、今年「春風ながさきよりXV」に特別招待した美術家福原金太郎氏からのメッセージが届いています。著名な美術家として活躍した氏が、同展の長崎において作品を発表するに至った経緯がそこに書かれています。RING ARTの活動は、ささやかな取り組みですが、人と人とのつながりを基本に地道に続けながら、その輪を広げてきました。更に私たちの活動記録を刊行物とすることで今後につなげ、作品発表の意義を改めて考える機会となり、繰り返しますが長崎の地域文化の活性化と新たな文化の発信拠点となり、その役割や使命を果たすために貴重な資料になると考えています。本誌がRING ARTの社会貢献への取り組みとして、広く一般の方々に理解を深めることを願っています。

最後になりましたが、共催としてご尽力いただいた長崎大学教育学部長山路裕昭先生を始め、関係者の皆様から感謝を申し上げます。そしてRING ARTの活動に携わっていただいた国内外のOB諸氏、通訳として陰ながら惜しみない協力で活動を支えていただいた申京愛氏と井ノ上理恵氏に、心から感謝の意を表します。

2013年7月吉日


RING ART 代表 野坂 知布

ロゴマークができました

「RING ART（リングアート）」の名は、ノベル化学賞を受賞された下村脩博士に、長崎大学より初の名譽博士号を授与する際、その賞状と共に井川惺亮の作品が添えられたことに由来します。

その作品は下村博士の研究に関係のあったオワンクラゲの「輪＝RING」をヒントにしたものでした。

その作品から生まれたネーミングやデザインには、平和やアートと人の繋がりとといった様々な意味が込められています。



メッセージアートとは？

美術作品以外にも長崎における平和活動者や詩人によるメッセージを寄せていただき、新たな美への発信として展示するというもの。これまでにない初の試みとして、「平和展・8+9 2012」開催時に行われた。

リングアートメンバーから

「RING ARTは国際的評価へ」

今春3月ポルトガルポルト大学ミュージアム主催で「春風ながさきより」展が、昨春韓国慶北大学校美術館主催で同名の「春風ながさきより」展に続いて開催された。このことは特にながさきにあって特筆すべきことだ。この「春風ながさきより」は長崎大学の私の研究室から13年前に立ち上げ、干支が一選して国際的に認知されたことになる。

この「春風展」の理念は、長崎の歴史や地域性を生かしたテーマで「まず展覧会を開催しよう」と言うところから立ち上がった。いつの間にか3つのキーワードが浮かび上がってきた。「地域」と「国際」、そして「平和」だ。平和は8＋9展が主体だが、一昨年の3・11の大地震と福島原発トラブルが発生し、その直後に本展は開催した。放射能漏れで来崎を危ぶまれたポルト大学のランジヨ教授が、日本が悲しく落ち込んだ状況に勇気を持って励ましに來られたことだ。続いて韓国からも朴南姫教授、姜パレム教授も駆けつけてくれた。こうして日・韓・葡の強

い絆が生まれたのだ。

現在世挙げてグローバル化に力を入れ、特に英語力が大事だという。けれども人間のコミュニケーションは古来より言語よりも直感的なヴィジュアルな人間言語として美術がもつとも高度なものとして知られており、特に絵画が果してきた事例は歴史的に見ても大きい。ルネサンス期のレオナルド・ダ・ヴィンチは科学や美学や全ての分野の大天才と言われたが、彼は「中でも絵画が特に素晴らしい」と述べている。

春風展は現代美術の立場として絵画が中心となるが、その絵画の中でも長崎発の「インスタレーション」と夏の「8＋9展」で「インスタレーション」及び「ワークショップ」を開催している。この二つの「春夏展」には「ギャラリートーク」も毎回実施している。前述の慶北大学校とポルト大学での「春風展」では「ワークショップ」と「共同のインスタレーション」などが展開した。何れも長崎発の我々の発想と手法が取り入れられた。

こうして「春風展」と「8＋9展」は着実に進展しているが、今後の展開としてこれらを盛り上げるためにもRING ARTのメンバーは作品発表活動をそれぞれが積極的に展開し、美の表現の力をもっとつけて行こう。

井川惺亮

リングアートは小さな輪を大事にしなから、次第に回転を続け、周りを巻き込み大きな輪へと発展しています。これからも大きく大きく回転を続け、

沢山の人を巻き込み発展していくことを私は願っています。長崎に残ったメンバーは少ないですが、日本だけではなく世界にリングアートのメンバーがいる。そう感じるだけで、なんだか凄いいことができそうワクワクします。私が作品を制作しながら最近思うことは「単純な繰り返しだが、それを重ねていくと複雑に見える。」これをリングアートの活動に重ねて見てもう私がいいます。「展覧会を続ける。続けることで深い意味が見える。」…そう思い、これからも一つ一つの展覧会を大切に続け、リングアートが大きく発展していくことを願ってやみません。

昨年は韓国、ポルトガルと「春風展」が開催され、充実した年となりました。これからも、長崎、そして長崎から旅立ったリングアートのメンバーと大きな輪を描いていくことを長崎の地について、夢見ています。

廣岩裕香

「

RING ARTには人と人が繋がらうエキスがあると思う。そのエキスは参加

す。2012年の春風が、慶北大学との2ヶ国開催になり、さらに、2013年はポルト大学での春風開催も、現実のものとなりました。

継続を力とするには、多く困難と紆余曲折を、連続的に経験する事となります。その過程においては、異なる文化や世代観にある現実と矛盾に、戸惑う事も多々あります。しかし、異なる事への理解と対応は、繋がり紡ぐ芸術交流の姿でもあると思います。美術表現は、もしかすると、突然を当然に、偶然を必然にする、不停止のアルゴリズムではないのでしょうか。そんな思い込みの中で、私にとつてのRING ARTは、懲りないChallengeとsuggestionの場所であると感じています。

また今年も2012年のメッセージアート・三和幼稚園児作品のから、2013年の8＋9展へ広がるRINGの波紋を、楽しみにしています。

末筆になりましたが、2ヶ国開催にあたりご尽力頂きました、ポルト大学・慶北大学、及び今も変わらずご支援をくださる長崎大学の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

佐藤千代子

井川研究室では学生の頃から展覧会の開催に関わります。資金も無く出品

者はもちろん、関わった全ての人へ、もれなく提供される。美術特有の世界観は、万国共通の形にならない言葉なのだろう。展覧会を重ねるごとに広く、そして深く繋がっていく。今期の春風展は、ポルトガルにおいても開かれたということが、その象徴であり、証明である。

私自身も思いもかけず、ポルトガルでの貴重な体験の機会を頂いた。現地での活動はお互いの違い、共通性が面白いほどに感じられる実に有意義なものであり、春風は、私の中にも吹いた。そんな、決して一人では到達できない領域に、RING ARTを通じてふれる事ができる事に、大変感謝している。いや、感謝という言葉には収まりきれず、長崎での春風展に出品した作品はポルトガル色に染まった。言葉足らずの私なりの表現方法だ。

今、自分に出来る事は限られている。でも、出来る事がきつとある。そのひとつが、お菓子を作ること。これもまた、この会を通して新たな研究・挑戦が生まれ、技術の向上・展開へと繋がっている。

菓子製造における香り付けの方法として、エッセンス、又はエキスの利用がある。エッセンスは、アイスクリーム等、常温以下での香り付けに適しているが、揮発性が高い為、熱を加える

製品では使用されないか、製造の仕上げでのみ使用される事が多い。一方、エキスは耐熱性があり、高温で一層高まる。焼き菓子で使うには非常に効果的とされ、生地中に練り込まれる事も多い。

RING ARTで得られるエキスは、我々の心の海の深層部に、小さな雫となつて垂れていて、大きな波紋を描いていることだろう。それゆえに、人と人を深く結びつけ、一回性のものではなく、長く続いていくのだろう。ただ、広がりが大きくなればなるほどに、それを支える運営の負担は相応である。残念ながら私も力及ばず、年々お世話になる事が増えていくばかりの様で申し訳ないのだが、エキスを受け取った若い世代の新規参入と活躍を是非期待したい。私はそれに備え、私なりに魅力ある波紋が生まれるよう、香りを高めようと思う。

岩永晃典

「

私はこの一年久しぶりにメンバーと共に活動した。というのも、社会人になってから思うように作品を作ることができず、展覧会からも足が遠ざかっていったからだ。

リングアートが再スタートを切って



—半島—
福原 金太郎

交通事故で7回の手術の為、数年間入退院を繰り返しておりましたが、頭部と脚部に障害が残って歩行不能となり、生きている事に感謝して自宅療養していた2012年の秋に、突然、井川先生が市川市の自宅に現れ、ベッド上の金太郎氏に、2013年春の長崎でのリングアート展への新作ドローイングでの出品のお誘いを受け、すっかり療養生活が板についていた金太郎氏は、驚愕して「分かりました、出品します！」と手を振って即答しました。

それから毎日少しずつ、車イスでのドローイングの制作が始まり「もういい」との言葉が制作完了の意味。びっくりするほどの集中力でした。

テーマは？と聞くと「半島」と答えました。急遽、以前事故前に制作した 同じタイトルの鉄の鋳物の立体作品（自然の風化作用を待つため、色付けするのに3年かかったもの）も同時に出品すると言い、「新作ドローイングと立体作品をどういう風に展示するの？」かと問うと、「相手にまかせる」との返答で、その様をお願いいたしました。

息子夫婦が、休暇を取って長崎まで付き添うので会場まで行こうと、うれしい申し出をしてくれたので車イスでの飛行機と福祉レンタカーの楽しい道中でした。金太郎氏も期待と不安の半々でしたが、やればできるものですね、車イス移動に自信を持ちました。

長崎では、井川先生をはじめリングアートの皆様に歓待を受け、とても感謝しております。有難うございました。

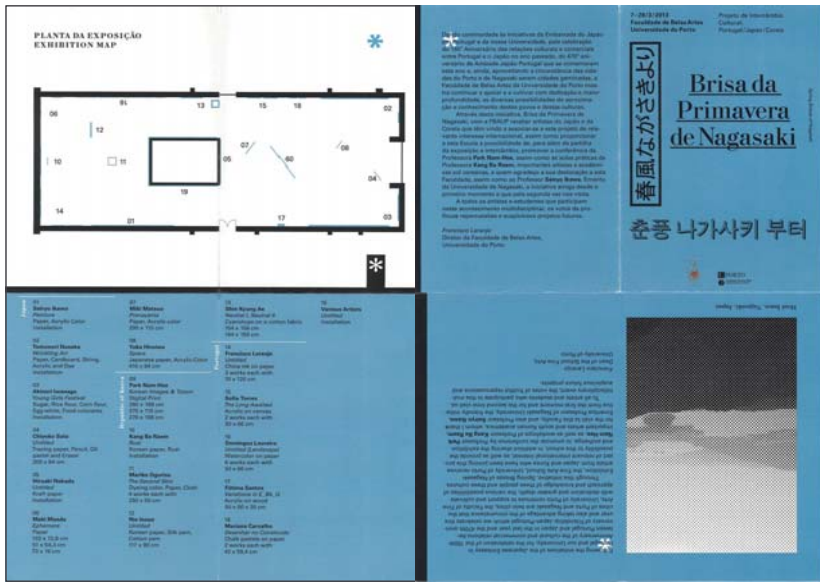
帰宅後の金太郎氏に感想を聞いたところ

- 「作品の存在意味のリアリティーが一番強かった。
オレの思い込みだけだね」
- テーマの半島とは？
「陸でもない海でもない半島に立ってみて考える自分を見る」
- 立体の方は？
「波に洗われた自分」

との返答でした。意味がわからないので本人の言葉そのままです。

2013年5月10日 福原金太郎 (代理) 佳壽子

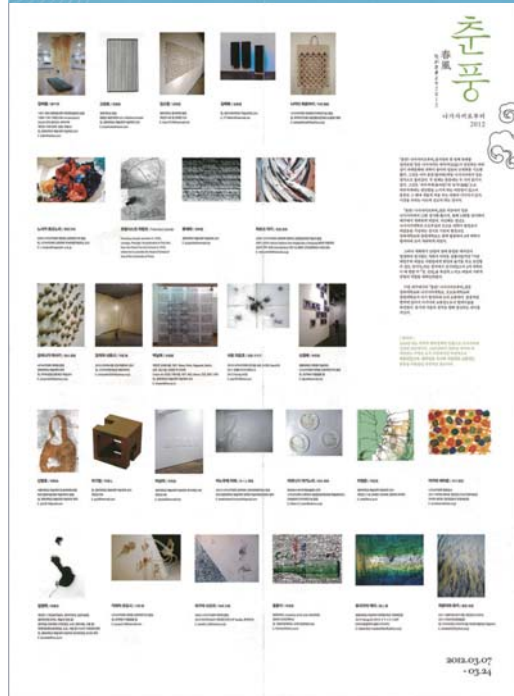




春風ながさきより 2013 / ポルト大学 (ポルトガル)



春風ながさきより 2012 / 慶北大学校 (韓国)



春風ながさきより XIV 2012



春風ながさきより XV 2013



平和展 8+9 2012



OBAMA de ART!



↑ 2013年6月
ポルト大学ホームページ (http://tv.up.pt/videos/6g65xpmz)



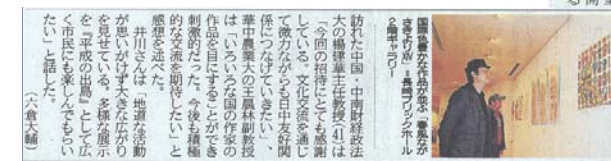
↑ 2013年3月27日 長崎新聞



↑ 2012年8月21日 長崎新聞



↓ 2012年8月25日 長崎新聞



↑ 2012年3月20日 長崎新聞



↑ 2012年11月24日 長崎新聞



↑ 2012年8月20日 西日本新聞



↓ 2012年8月19日 NHK 長崎放送局ニュース